



▲昭和33年当時の2代目駅舎。春にはホーム上の桜並木がきれいな花を咲かせていました。



▲現在の駅舎は3代目。1日に上下約160本の列車が行きかいます。



▲まだ田園が広がる津田－長尾間で貨物列車を引く蒸気機関車（昭和33年）。

河内そうめんも弾薬も運んだ、東部市民の足

津田駅

明治31年4月12日、津田駅は四条畷―長尾間を結ぶ新しい鉄道の駅として誕生しました。明治時代、枚方から大阪へ向かう交通手段といえば淀川を行きかう船でしたが、津田や長尾の人にとって淀川は遠く不便で、大阪へ行くのに半日以上もかかっていました。大阪と奈良を結ぶ鉄道の計画が持ち上がったのを機に津田・菅原の両村で鉄道の誘致運動が起こり、駅の用地を鉄道会社に寄付するなど住民の熱い思いもあって、現在のJ-R片町線（学研都市線）のルートが決まりました。大阪市内への通勤に津田駅を利用していた春日元町の奥田一雄さん（85歳）は、「貨物の引き込み線に河内そうめんの木箱が積まれていてね。駅前の運送会社が忙しそうに荷物を運んでいましたよ」と貨物輸送で賑わっていた頃を振り返ります。戦時中は禁野火薬庫から津田駅まで軍用鉄道が敷かれ、大量の弾薬が戦地に向けて運ばれたこともありました。

片町線には、昭和25年の電化後もしばらく蒸気機関車が走っていました。「窓を開けたら煙がどんどん入ってきて服はすぐ真っ黒。でも大阪から枚方に入ると空気が涼しく感じられてね。家に帰ってきたなんて嬉しくなったものですよ」と奥田さんは懐かしそうに話します。片町線は昭和54年に四条畷―長尾間が複線化され、平成9年には東西線の開通により神戸や宝塚へのアクセスも便利に。津田駅の利用者は一日平均約1万2000人（平成21年度）を数え、開業から112年を迎えた現在も東部市民の重要な足として欠かせない存在です。

（平成22年9月号）